

## 笑考快議処 & お酒・瀬祭(だっさい)とのご縁

ここ6～7年ほど、「笑考快議処の旗振り役」として、皆さんを「ユーモアの世界」に引きずり込んでいただいた「若狭芳生さん」は、2007年に出版した「駄じゃれの泉」を、先輩の会員・梶田さんから、PRし甲斐のあるところがあると誘われて参加、皆さんが快くその場で買ってくれ、気を良くして、「笑考快議処」に入会、ところが、バックには「湘現会」というパトロンがいて、別に年会費を支払う羽目になったと、生前おっしゃっておられました。

今年の2月、天国に召され、「湘現会」としても、「節目」には、持ち前のパーソナリティ振りを発揮、誠に大きな財産を失うことになり、寂しさが込み上げてきます。

私も、「湘現会」に入会した時の、大きな楽しみは、隔月実施の「笑考快議処」に必ず参加して、戦後の日本を復興したのは「俺たちだ?」と、毎回15人程度の「強者連中の面々」が、「喧々譁々」とやるものだから、「借りてきた猫同然」、実に含蓄がある出来事ばかりで、「我ひとことも言えず」の雰囲気なるも、「お酒のおつまみ」としては、お話しそのものは「最高の逸品」でした。

ところが、当時は、強面(こわもて)の「故・西原さん」が「幹事役」として、「本会は飲むためのものじゃなく、人間を磨く会合」と嘯いて?いるものの、「注文お聞き役先輩」は無類のお酒好きでしたし、彼も私も「聞き役」だけでは収まらず、「飲み役」の「二役(ふたやく)」を見事に演じました。

それでは肝心の「お酒の瀬祭」との関わり合いに参りたいと思いますが、齢70歳になるまで「お酒造りは杜氏(とうじ)が丹精込めて仕上げるもの」と信じ込み、銘酒には、それなりのお値段も付き、納得するものの、「参加した居酒屋」には、「お酒の瀬祭」が、目玉品のように提供されて、「実に口当たりが良く、ワイン風」で、なんぼ飲んでも酔いもせず、「注文追加の先輩」が、次から、次へと、目配せするものだから、これでもか、これでもかとお互いに、盃のピッチも早くなり、いつもより、一人当たりの平均単価が、5～6百円近くほどアップ、ご本人は、西原さんから大目玉を喰らって恐縮なるも、「我ダンマリ」で一巻の終わり、悪いことしたなど今でも後悔しています。

なぜ、これほどまでに「旨いお酒」が、なぜ、こんなに「安い」のだろうと、大いに興味も湧き、調べたところ、「瀬祭」は、工場の中には「杜氏の姿はなく」「IT技術で匠の技術を極めた」とのことで、「我が国の先進企業の鏡みたい」にもてはやされていました。

私も宣伝の片棒を担ぐが如く、ロコミだけではなく、あちこちに、贈り物をして、喜ばれましたが、あっという間に品薄で、値段も高騰、手に入りづらくなり、工場を新設したにもかかわらず、なぜ、値下げして、庶民に応えないのかと、恨めしさだけが残り、ここ5年ほど、ちょっぴり腹を立てて、宴席で薦められても、遠慮気味で、これを機会に、「お酒も棚上げ」となれば、「健康数値」も格段に良くなり、「瀬祭さまに感謝!感謝!」になるかも知れませんね。